

特集

子どもと春

わが子の春

石動瑞代

春の訪れ

厳しい冬の寒さも緩み、暖かな日差しと柔らかな風を日増しに感じる三月。子どもの心には、新しい学年への期待がぐんぐんと高まっています。

仕事忙しい年度末の時期。親のほうは目先の時間に心を奪われて穏やかでないことが多いのですが、その傍らで「○○組さんになったらね……」と、子どもは新しい生活を思い描きながら話します。

その明るい表情と瞳の輝きに触れて、親である私もふと時の流れを感じ、ようやく周囲の春の空気に気づくようになります。子どもが保育園という社会に参加

するようになってから、私は「春の訪れ」を、「子どもの新しい生活への期待に満ちた姿」から感じるようになりました。

一つ大きくなること

子どもは「大きくなる」という実感を、一体どんな時にもつのでしょうか？ 誕生日を迎えた時は、一昨年が増えたことを喜びながらも、案外大きくなったという実感をもっていないように見えます。むしろ、「自転車に乗れるようになった」「跳び箱が跳べた」など、今までできなかったことができるようになった時、子どもは「大きくなった自分」を感じているよう

に思いますが、それは一瞬の喜びでもあります。

保育所という自分なりの社会生活の場を獲得した子どもにとって、クラスが変わるといことは「大きくなる」ことを充分に実感できる機会であると思いません。何しろ、かすかな春の訪れを感じずるや否や、新しいクラスでの生活や役割を思い巡らし始め、約一か月以上もかけてかみしめていくのです。

時には、周囲の大人に「そんなことしていたら○○組さんになれないよ」などと巧みに利用されて、不安や緊張を感じることもあるけれど、期待は着実に膨らんでいきます。園での生活経験の記憶を総動員しながら「○○組さんになった自分」を思い描き、それを実現したいと思うエネルギーは、次第に凝縮されて子どもの中に満ちていきます。このころの子どもの姿は本当に生き活きとしていて、つい「本当に○○組さんになれるかな？」などという不用意な言葉を投げ掛けそうになる私に、その言葉を飲み込ませてくれます。子どもにとっては、今が「一つ大きくなる」自分を楽し

む大切な時間なのだと感じつかされるのです。

期待から不安そして現実へ

四月。新しいクラスでの生活が始まる日。これまでの期待がぱっと花開く時がやってきます。この一日の始まりは、本当にエネルギーに満ちていると感じます。それは、つぼみが開花するような華やかな感じもありますが、どちらかといえば、今まで小さな種の中に閉じこもっていた力が外に放たれ、土から芽が出た瞬間のポコッという感じでもあります。大きなエネルギーが放たれて外に現れた姿は、実際にはまだ弱々しく、初めて出合う風に揺らいでいます。子どももまた、不安に揺らぎながら現実の生活をスタートさせていくとさだからでしょう。

昨年四月、とうとうわが子も年長さんになりました。保育所六年目となるわが子は、「年長さん」が活躍する姿をずっと見て憧れてきたため、その喜びも大きかったようです。最初の登園日にはネクタイを着け

特 集 子 ども と 春

て登園しました。彼は「ネクタイ」が年長さんになったシンボルだと考えたらしく、自分から着けたいと言いだしたのです。その日の朝の晴れやかな表情は、今でもはつきりと思いつき出すことができます。

あれから一年。年長さんとしての役割や行事などを体験したけれど、その内容は思い描いていた生活とは少し違っていました。異年齢児クラスでは、なかなかリーダーシップを発揮できず苦労しました。運動会の鼓笛など年長だけの活動では、憧れていた役に就けず、違う役割を担うことにもなりました。年長だったらできると思った遊びや運動も、自分にはどうしてもできないものがありました。もちろん期待以上の楽しい生活もあつたけれど、期待どおりにはいかないことをたくさん経験した一年でした。がっかりした表情、悔しい表情を見せるわが子に、私はよいかかわり方を見いだせず、ただ見守るしかできませんでした。それでもわが子のほうは、少しずつ自分の思いを修正して現実の生活を楽しんでいました。子どもにとっ

ては、保育園という社会の中で、友達のを認め、自分の姿を見つめながら自分らしい生活の仕方をつくりあげていく一年間だったように思います。そしてそのプロセスを支えたのは、やはり三月から四月にかけて高まった「生活の主体者」としての意欲だったと感じるのです。

「春」という自然がもたらす「伸長」のエネルギーや明るさは、子どもの一年間の生活を育むに充分な力を与えてくれるようです。

「むかし」の話

わが子はいつのころから「むかし」という言葉をよく使うようになりました。「むかし、ぼくが好きだったね」「むかし、ママが言ってたよね」などと表現される「むかし」は、ほんの数日前のことでも多かったのですが、さすがに六歳にもなるとおよそ一年以上は前の出来事を意味するようになってきました。そして「むかし」の代わりに登場したのは、「〇〇組の時」で

した。時折、大人がわが子の思い出話をする、「それははくが何組の時の話なの？」と聞いてきます。そして「何歳？」と続けるのです。一歳前から保育園に通うわが子の場合、過去の話のほとんどは「〇〇組の時」で説明できるからかもしれません。けれど、自分のことを振り返る時に使う「〇〇組の時」は、彼が、春に新しく始められる園生活を一つの単位として時の流れを整理するようになったということでもあるように思います。やはり「春」というのは、子どもにとって特有の意味や深さをもつ「時」なのだと思います。

もちろん親である私にとっても、「春」はわが子の成長を立ち止まって確認し、改めて感謝と喜びをかみしめる特別な時間です。日ごろは目の前のわが子の姿にのみ心配したり焦ったりする私も、進級の前後には神妙にこれまでの姿を振りかえり、成長の喜びを感じることができます。残念ながら進級後の姿については、期待よりも心配が先立ってしまうのですが、それでも何となくワクワクした気分にもなります。この時

間は、親として頑張った一年を自分なりに認める時でもあるように思います。

保育園での時間

四月からは、わが子もいよいよ小学生。わが子は「〇〇組の時間」ではなくて「保育園での時間」として、むかしの時間を一括りに整理しようとしています。親である私も、これまでの時間を整理していかなければならないようです。

私は保育園での時間をどうしても「親からの分離」という視点でとらえがちでした。まだ歩くこともできないわが子を初めて保育園に託した最初の春、その複雑な心境がずっと心の奥底にうずまいていたからです。

さらに二歳のころ、寝かしつけに読んだ『よるくま』（酒井駒子・作、偕成社）の絵本で見せた子ども
の涙を忘れることができませんでした。『よるくま』は、寝ている間になくなったおかあさんくまを捜すこぐまが登場する話なのですが、わが子は固い表情で



絵本を見つめ、二人が再会する場面でぼろりと涙を落
としました。その姿は、幼い子どもに不安な時を過
させている現実を示すものとして、私の心に深く刻み
込まれています。結局私は、最後まで「遅お迎え」を
待っていたわが子に、不安を解消してやることはでき
なかつたように思います。

しかし今振り返れば、彼は確実に成長し、保育園で
の時間の中に、しっかりと自分の生活を築いてしまし
た。保育園での時間は、母親からの分離の時間ではな
く、子ども自身の時間となっていたことを改めて感
じ、それを支えてくださった先生方やお友達に感謝の

気持ちでいっぱいです。

そして、一緒に子育てをしてきた夫、さまざま支
援をしてくれた両親たちのおかげだとしみじみと感じ
ます。新しい春を前に、私も親として、何とか一つの
ステージを終えることができましたようです。

新しい生活に向けて

わが子は今、小学生の自分に期待を膨らませていま
す。転居によって未知のことばかりの小学校生活を強
いることになり、不安も大きいだらうと思うのです
が、彼なりにしっかりと前を見据えています。

新しい生活を歩みだそうとするわが子は、これまで
以上にエネルギーに満ちているように見えます。子ど
もの時間に、親である私が少し離れてついでいく。私
はそんな距離のとり方を考えながら、いよいよ一年で
最も凝縮された時を迎えようとしています。そしてま
た、親としての新しいステージが始まります。